

“我的訪談主題及經驗 — 日治時代台湾人的「自我塑像史」”(拙稿・1995) について

所 澤 潤

東京未来大学こども心理学部 こども保育・教育専攻

(2014年1月2日受理)

私は1995年7月に、台湾の中央研究院近代史研究所が発行する『口述歴史』第6期(pp.229-244。期は号の意味)に、「我的訪談主題及經驗—日治時代台湾人的「自我塑像史」」を掲載した。オーラルヒストリーに取組み始めたばかりのころの私の考えを述べたもので、オーラルヒストリー研究の意義や、学校教育歴を軸として聴き取ってまとめることについて、当時発表したものを踏まえながら説明している。また、日本語世代台湾人の中で重大な問題であった入学における差別的扱いの問題や、まだ台湾における研究ではまだ殆ど注目されていなかった台北高等学校の社会的機能などについても言及している⁽ⁱ⁾。

その頃、私は台北在住の台湾人医師・張寛敏氏から1992年8月22日に聴き取ったオーラルヒストリーを「聴取り調査：外地の進学体験(Ⅱ) — 台北一師附小、台北高校、台北帝大医学部を経て、台湾大学医学院卒業 —」という名称で『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第44巻(pp.139-187、1995年3月30日)を発表したばかりであった。当時まだ、日本の台湾史研究では、統治された側で、かつ戦後も台湾に住み続けている台湾人の方たちに、日本の統治をどのように考えているかを聴き取ったものは皆無に近かったので、中央研究院近代史研究所の許雪姬氏がそのことに目を留め、私は『口述歴史』へ寄稿することを依頼されたのであった。ちなみに、外地の進学体験(Ⅰ)は、台北帝大医学部から日本への引き揚げ後東北帝国大学医学部に編入して医師となった台湾生まれの内地人・泉新一郎氏のオーラ

ルヒストリーで、1990年6月21日に聴取り、1993年3月に「聴取り調査：外地の進学体験—台北師範附属小から台北高校、台北帝大を経て内地の帝大に編入—」(全41頁)という題目で、入学者選抜の史的な研究を課題とした科研費の研究成果報告書に掲載したものである。

私が寄稿した文章は、読者として台湾人を想定したもので、当時、国立政治大学副教授であった、黄紹恒氏(現・国立交通大学教授)に中国語訳を依頼した。そのため日本側の研究者にはあまり目に触れていないものである。ここに原文(補記を含む)を発表することとした。オーラルヒストリーの方法論として現在も内容に意義があると判断するからであるが、またその後、私は台湾人のオーラルヒストリーを10篇以上発表してきたので、そのことから、私の原点を日本語で公開し、併せて註としてその後の展開を示しておくことにも価値があると考えている。

表題に記した「自我塑像史」という中国語は、日本語の「自己形成史」のニュアンスを中国語に伝えるようにするための訳語で、国立台湾師範大学・呉文星教授と黄紹恒氏の協力を得て考案したものである。

私がオーラルヒストリーに着手した理由は、当時の原稿に十分には書き込んでいないので、ここで4つにまとめておきたい。第一に、私はその直前の1988年に刊行された東京都文京区立誠之小学校の学校沿革史『誠之が語る近現代教育史』⁽ⁱⁱ⁾の自身の

執筆について、振り返って文献調査に徹していたことに後悔の念を持っていたということがあった。文献資料では解明できないことで、当事者に当たればすぐに明らかになることが非常に多かったにも関わらず、採訪を行わず、当事者の回想を録音記録として収集しなかったのである。第二に、日本で台湾について書かれた学術的著作の多くからは、台湾人が日本人と対立していた側面が強調されており、台湾人の日本語世代の方々と話して受ける印象と、著しい相違があったということがあった。私は、1980年に現地の日本語世代の方々と話をして日本で日本人の年配者と話しているのと同様な情感や論理を感じていたのである。第三に、その延長となるが、日本で書かれている植民地教育史から感じる印象と、現地の台湾人が語る内容に別次元のような趣があり、日本人の研究者が台湾人に記憶を語らせることを恐れているのではないかとさえ思われたということがあった。そして第四に、台湾ですでに多くの台湾人のオーラルヒストリー（現地では口述歴史と呼ばれる）が刊行されていたが、北京語で書かれた内容に、日本語では決して語られないような中華民国の立場の表現が散見され、日本語世代の人たちの真意が、当時台湾で刊行されていた口述歴史にはよく現れていないように感じられていたということがあった。

当時私は、まだオーラルヒストリーという研究方法も名称も知らなかった。しかし、そのような背景をもって聴取りを始めたことにより、語りを時間的順序に沿って整理をしていくという方法、すなわちオーラルヒストリーという方法に、学術的な有効性があることに気づくことになった⁽ⁱⁱⁱ⁾。それは、最初にまとめた泉新一郎氏の語りの質が、そのような編集作業を促すものであったことが大きい。しかも、文献には現れない多くの情報が含まれていたことも、やはり方法の有効性を感じさせるものであった。

背景に以上のようなことがあったことを、当時の原稿に書き込まなかったのは、原稿を執筆するに当たって、当時の日本の学術の状況を批判することに目的があるのではなく、台湾の人々に台湾人の成育歴を語る価値を伝えることに価値があると考えたか

らであった。

私は、その後、「外地の進学体験」を第9篇まで（内地人2名を含む）発表したほか、科研費プロジェクトにより、東京女子大学栗原研究室等から刊行している『台湾口述歴史研究』の第5集と第8集にも各1篇ずつ発表した^(iv)。『口述歴史』に原稿を寄稿した頃は、かなり明確に入試に絞ったまとめ方をし、私は編集に際して、関連しない情報をかなり多く削除するという考えに立っていた。しかし、医師・陳漢升氏の体験を聴き取った「聴取り調査：外地の進学体験⁽ⁱⁱⁱ⁾—抵抗の地・龍潭から基隆中学校、台北高校を経て、長崎医科大学卒業—」を1996年に発表した際に、群馬大学を1994年に定年退官された日本史の故・西垣晴次名誉教授から、前作に比べ生活誌の内容が多くなってよい、と個人的に評価を頂き、以来、聴き取る内容に生活誌を増やすとともに、まとめるに当たっても、そうした側面を活かすように方向性を改めている。その後、2003年3月に、私は台湾史研究の方法論として、オーラルヒストリーについて「歴史資料としての記憶—歴史研究とオーラルヒストリーの採集—」^(v)を発表したが、それは改めた後の立場で執筆したものである。

ここに紹介する日本語原文の内容は、補記も含め当時執筆したものであるが（但し誤植は修正）、註は、今回原文を掲載するに当たって加えたものである。

補 記

張寛敏氏が、本稿を寄稿して間もない2014年1月14日に亡くなられ、氏が次の世代に遺された口述自体もまた歴史となった。本稿の校正を行いながら、氏と出会った重みを改めて感じている。冥福をお祈りする。(2014.3.4)

註

- (i) たとえば、2012年10月には、国立台湾師範大学台湾史研究所主催で、国際シンポジウム「台北高等学校創立90周年国際学術研討会」が開かれるなど、現在は1990年代に比べて台北高等学校に対する関心は高い。
- (ii) 寺崎昌男監修『誠之が語る近現代教育史』東京都

文京区立誠之小学校学友会編、1988。私は、第2部「誠之小学校百十年史—東京における公教育史の一断面—」中、第一編「小学校教育の形成と誠之(明治八年～三十五年)」(全18章、pp.79-488)、第4編「現代の誠之(昭和三十六年～六十二年)」の内第1章「教育目標」(pp.846-860)と第4章「学校経済の現況」(pp.864-891)などを執筆した。

- (iii) 現カリフォルニア大学教授のDr. Ming Cheng Lo(駱明生)が台湾でフィールドワークをしている際に、張寛敏氏宅等に出遭い、ご教示を得た。
- (iv) 独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金基

- 盤研究(A)(海外学術調査)「台湾人の口述歴史の採集分析に基づく日本統治から戦後への台湾社会の転換に関する研究」平成17年度～19年度：課題番号17251005、及び平成20年度～23年度：課題番号20251005。「日本の敗戦と新しい国境による台湾・沖縄の変容の口述歴史に基づく研究」平成25年度～28年度：課題番号25257009(いずれも研究代表者:東京女子大学栗原純教授)。『台湾口述歴史研究』は平成26年1月現在で第8集までが刊行されている。
- (v) 台湾史研究部会編『台湾の近代と日本』中京大学社会科学研究所、2003、pp.405-419

【日本語原文】

進学体験

—日本統治下台湾の自己形成史

所澤 潤 (日本・群馬大学教育学部助教授)

中文訳：黄 紹 恒 (政治大学副教授)

1 聴取りと私の研究テーマ

私の行っている聴取り調査は、1990年に着手したもので、日本統治下の台湾の進学体験を主題としたものである。日本語による対談を再現する形態の口述歴史としてすでに日本人の口述1篇、台湾人の口述1篇を発表している。聴取り調査は、日本の大学入学試験史の研究の一環で、日本の入学者選抜システムが、かつて台湾、朝鮮などを含む日本全土でどのような制度としてどのように機能していたかを、制度的な関心から知ろうとして行っているものである。

しかしまたそれは、台湾における台湾人(日本統治下では本島人と呼ばれていたがここでは台湾人とする)と日本人(日本統治下では台湾人も日本人に含まれるので、以下、日本統治下の時期については内地人とする)の自己形成史を主題としたものとなっているといってもよいであろう。進学は、個人の目から見れば人生の節目であり、しかも近代日本の社会では、国民の多くがくぐりぬけた仕組みである。台湾が日本であった当時、当時の内地人だけでなく、

やはり日本国民であった台湾人もまた、中等教育以上の教育を受けようとすれば、それは逃れることのできない仕組みであったのである。そしてそれは必然的に、その背景をなす日本の一部としての台湾社会の仕組みの一端をよく示しているといってもよいであろう。

発表したものは次の2篇である。

- ・所澤潤(聴取り・解説・註)・泉新一郎(口述)「聴取り調査：外地の進学体験—台北師範附属小から台北高校、台北帝大を経て内地の帝大に編入—」(全41頁)『入学試験の制度及び試験問題の分析に基づく近代日本の学力の歴史的研究』平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究C)〔課題番号01510140〕研究成果報告書 1993年3月〔研究代表者 東京大学教育学部教授 稲垣忠彦〕
- ・所澤潤(聴取り・解説・註)・張寛敏(口述)「聴取り調査：外地の進学体験(Ⅱ)—台北一師附属小から台北高校、台北帝大医学部を経て台湾大学医学院卒業—」『群馬大学教育学部紀要』1995年3月、139頁-187頁

2 自己形成史と聴取り

私が台湾で聴取りの対象としているのは、現在ほぼ65歳以上の、いわゆる日本語世代の人達である。現在聴取りが可能な日本語世代の人は、殆どが、大正11(1922)年に改正「台湾教育令」が公布・施行されて以降の教育制度を体験している。この制度の下では、中等教育以上の教育は、台湾人と内地人の共学となっており、一般的に台湾人の方が不利であったと思われるが、ともかくも入学試験を通して台湾人と内地人は、同じ学校への入学を目指していた。

当時の学校制度では、初等教育の年限は今日と同じく6年だが、中等教育以上は、今日の日本とも台湾とも違っていた。年限は、中等教育が5年で、さらに大学に進む者のために3年間の高等学校(英語で、higher school、例えば台北高校)があり、その上に3年制の大学(医学部医学科は4年)があった。中学校でなく職業学校に進めば高等学校に進めず、高等学校でなく台南高等工業学校(台南工業専門学校を経て現・成功大学)のような高等専門学校にゆけば、原則としては大学に進学することができなかった。今日の単線型の制度に対比して、当時のこのような制度を複線型の制度という。また、女子の中等教育機関は高等女学校とよばれ、高等学校に進学できない制度で、従って女子の大学進学は極めて限られたものであった。台湾では、日本語を常用しないものために、小学校に相当する公学校が設けられており、台湾人の多くはそちらに通っていた⁽¹⁾(内地人が入学した例も稀にあったという)。

このような制度下にあったので、日本語世代の男性の場合、進学の分岐点は次のようになる。即ち、(1)就学前教育として幼稚園に行くかどうか、(2)初等教育として小学校と公学校のいずれに行くか、また小学校に行くなら、受験校を選ぶかどうか、(3)中等教育に進むならどこの中学校に行くか、また中学校に行かずに高等小学校や職業学校や師範学校に行くか、そして(4)高等教育に進む場合は、大学を目指すならどこの高等学校に行くか、そうでなければどこの高等専門学校などに行くか、(5)高等学校を終え

たものはさらにどこの大学へ進むか。殊に(3)以降の分岐点は、いずれも生涯を大きく左右するものであり、自分の能力を開発し、日本社会の中に自分の位置を切り開いて行く分岐点であるという意味で、また自分の能力・適性・条件を見極め、自分が日本社会のどの位置に納まるかを見出して行く分岐点であるという意味で、自己形成とは不可分のものであった。そしてそれは、日本語世代の台湾人にばかりでなく、当時の台湾に生れ育った内地人にもいえることである。

また、この世代の台湾人に共通する体験として次の2つを挙げておきたい。1つは、若い時期に戦争を体験していることで、学校の中で日本の軍人として組織された体験(学徒兵という)を持っている人も多く、中には現役として従軍した体験を持っている人もいる。もう1つは中華民国の制度への転換を体験していることで、在学中に体験した人も多い。いずれも人生の大きな経験であったので自己形成に大きな影響を及ぼさずにはいなかったが、また進学と深く関わっているという点からも、自己形成に大きな影響を及ぼした。

3 発表した口述歴史

私が既に発表した2篇の口述歴史は、台湾人医師張寛敏氏(現・台湾大学医学院教学教授)のものと日本人医師泉新一郎氏のものである。2人は親友で、大学入学までほとんど同じ経歴を歩んでおり、その口述は、進学という制度を台湾人と内地人という異なる角度から並行して経験しながら、共通する学校生活を積んでいったことを感じさせるものである。徴兵は2人とも体験しているが、泉氏の方が張氏よりも悪い印象を持っている。この2人の体験の概略を、進路の選択という点から紹介しておこう。

2人は、ともに昭和7(1932)年4月に台北第一師範学校附属小学校に入学し、同級生となった。張氏は、親の希望にそって同校の入学試験を受けており、親は幼稚園に通わせるなど、日本語を常用するように親が準備をしていた。泉氏は台湾で一番よい小学校に入りたくて同校の入学試験を受けた。2人は昭和13(1938)年4月に台湾の中学校中最難関の

台北高校尋常科(中学校に相当)に入学したが、両者とも小学校時代に徹底した受験教育を受けている。ただ泉氏が学校の補習などを主たる受験勉強の場としていたのに対して、張氏はさらに家庭教師がつき、むしろ家庭が主たる受験勉強の場であった。2人は高等科を経て、昭和19(1944)年10月に台北帝大医学部に共に不本意ながら入学した。張氏はもともと医学部志望であったが、戦況の悪化のため内台航路の危険性を考慮して東京帝大医学部受験を断念している。泉氏は、徴兵を嫌って高校文科から戦略的な選択として同医学部を選んだ(結局入学直前に徴兵されたが)。戦後、台北帝大が中華民国に接収されると、張氏は台北帝大医学部後身の台湾大学医学院の学生となったが、泉氏は、日本人の継続就学が認められなかったことと父の泉風浪氏が台湾残留を諦めたことにより、日本に引揚げて東北帝大医学部に編入した。2人の今日にいたるまでの人間関係を決定づけたのは、台北高校尋常科で同級生だったことである。

2人は、同じ様な経路をたどって大学まで進んだわけだが、台湾における台湾人と内地人の社会的地位の違いが両者の自己形成の過程を異なったものになっている。張氏は台湾人のアイデンティティを相当強烈に保ちながらも内地人との一体感を形成して行き、泉氏は台湾の中で内地人という立場を濫用する内地人に対して強い敵意を持ちながら、台湾人もまた同等の日本人という意識を保ち続ける。私の受けている印象では、2人の持つ「日本人」という概念は、今日風の一民族的な日本人概念ではなく、多民族国家である日本を構成する多民族的な日本人概念であったように感じられる。

なお、両氏の父は、それぞれ台湾史では注目される存在である。張氏の父張文伴氏は、台北市内の著名な蓬莱産婦人科医院の院長で産婆講習所所長も勤めていた。泉氏の父泉風浪(いずみ ふうろう)氏は、総督府や内地人のありかたを批判したことで知られるジャーナリストで、日治末期には台北鉄道会社の社長をしていた。

4 聴取りから

台湾における興味深い受験の実態を、特に台湾人に関わる部分に焦点を当てて、未発表の聴取りから得られた情報も含めて紹介しておこう。

- ① 当時は、初等教育段階で公然と受験教育が行われていた。張氏と泉氏の入学した台北第一師範学校附属小学校のほか、台北市内の南門小学校(現・南門国民小学)、旭小学校(現・東門国民小学)などが著名な進学校で、日本全国どこでも見られる状況と同様な状況であった。ただ、公学校在学していた台湾人進学志望者の経験は、公学校在学して小学校よりも進学に不利だ、というゆがんだ条件のせいで、日本内地の突出した進学校の受験準備教育よりもさらに極端なものになっていたように感ぜられる。一部の公学校では小学校よりもずっと徹底した受験教育が行われ、受験クラスでは小学校用教科書を併用し、学校の行事なども全く無視していた。また、台湾人の場合に、小学校在学にせよ、公学校在学にせよ、家庭内で徹底した受験教育を行っていたことを聞くこともある。
- ② 小学校では台湾人を1クラス数名しか入学させないのが通例だったといわれているが、樺山小学校など一部の小学校では昭和10年代になると次第に多くの台湾人を入学させるようになっており、台湾における初等教育の構造が変りつつあったように感じられる。
- ③ 昭和14(1939)年に中学校として認定される以前の長老教中学校(認定後、長栄中学校)のように制度上、上級の学校への進学のできない中等教育段階の学校があったことが知られているが、内地の中学校等へ編入するという方法で上級の学校に進学できる制度上の抜け道があった⁽²⁾。また聴取りをした1人はそのようにして日本歯科医学専門学校(現・日本歯科大学)を卒業して歯科医となり、その後、さらに東京医学歯学専門学校医学科(現・東京医科歯科大学医学科)に進み、医師となって戦後、帰台している⁽³⁾。
- ④ 台北高校及び台北帝大豫科にほとんど差別が存在しないということが、多くの台湾人にとって

は驚きであったようである。教師は学力本位で台湾人生徒を扱い、また、内地人生徒から台湾人に対する差別意識を感じることもほとんどなかったという。しかし、それでも台北帝大豫科に入学したある台湾人は、特に内地から入学してきた生徒に全く差別意識がなく、これが同じ内地人かと思うほどに驚いたと、語っている⁽⁴⁾。

- ⑤ 台湾人中学生の間には、台北高校でなく、内地の高校に進学した者もかなりあった。台北では高等学校へゆくといえば台北高校のことであったようだが⁽⁵⁾が、台北以外の地域の台湾人の間では、内地の高校も選択肢の一つと考えられていたらしい。台湾人が主として入学していた台中一中（現・台湾省立台中第一高級中学）では、内地の高校に進学した先輩の台湾人が内地の高校への進学を勧誘しており、同校の生徒の間にも「内地には差別がない」、「内地の高校の方が一流であるから内地に行きたい」、という意識があったという。
- ⑥ 台北帝大は、内地人ばかりでなく台湾人にとっても全国の大学の中の選択肢の1つに過ぎなかった。台北高校を卒業した1人の台湾人は、台北帝大医学部の受験に失敗し（その年は珍しく入学試験があった）、翌年、長崎医科大学（現・長崎大学医学部）に入学し、却って自由で、差別のない内地を経験してよかったと語っている⁽⁶⁾。前述の張寛敏氏は、戦争末期に内地への航路が危険となったために東京帝大医学部志望を断念して台北帝大医学部に進学している。
- ⑦ 台北高校入学者からは、戦後台湾の新学校制度への失望を聞くことがある。台湾では、日本の複線型学校制度から中華民国の単線型学校制度への移行にともなって、日本の時代には大学入学の権利を持っていなかった多くの専門学校、師範学校の卒業生が、一斉に台湾大学に入学することになった。新制度のため大学のレベルが下がったこともあって（日本でも新制大学移行の際に同じようにレベルが低下したが、日本では旧制大学生と新制大学生を最後まで別個に扱ったので台湾ほどの混乱はなかった）、大学入学の特権を勝ち取っていた高等学校生、台北帝大豫科生たちの間には、

つまらないことになったと思った人達がかかりいたようである。

5 台北高校の存在

聴取りには、台湾総督府の統治に関わる様々な事項が現われてくるが、本稿では、台湾の受験生にとって特別に大きな目標であった台北高校の存在と、台湾人にとって今なお最大の不満として残っている台湾人の入学制限の2点について触れることとし、前者について本節で、後者について次節でとりあげたい。

近年、李登輝総統ほか台湾の政府官界財界の要人が同校の出身であることが知られるようになり、にわかにも注目を集めているが、最近まで、卒業生以外で関心を寄せる台湾の人はあまりいなかったように見受けられる。しかし、当時の日本では、高等学校に入学することがエリートの条件であり、当時の受験生の目標は大学に入学する事ではなく高等学校に入学する事であったことを考えると、今後、台湾史の研究が深まっていくに連れて、同校への関心は高まっていくと考えられる⁽⁷⁾。当時、大学は、原則として高校卒業生が無試験で入学するところとされており、台北高校卒業生も例外ではなかった。事実、東京帝大でも入学志願者の少ない理学部や文学部では高等学校卒業生が無試験で入学していた場合もかなりあったのである。もちろん台北帝大医学部も、入学試験があったことは稀で、ほとんどの年度で無試験入学であった⁽⁸⁾。

しかし、台湾人の自己形成過程という観点から同校を見る時、優秀な人材を集めて教育し、大学へ送り込んだという以上の機能を、同校が担っていたことに注目すべきであろう。内地人生徒だけでなく、台湾人生徒に対しても、自分自身を台湾という枠内の存在ではなく、日本全体のレベルのエリートという意識を持たせたのである。それは、日本統治下の朝鮮と比較すると明白に浮かび上がる。高等学校レベルの学校として京城帝国大学豫科しか設けられなかった朝鮮では、多くのエリート予備軍は、高校入学段階で内地に行かない限り、制度上、京城帝大にしか進学することができなかった。多くの朝鮮人に

取っては内地の大学は進学の見地に入っておらず、切り離された別世界であった。それに対して台北高校の台湾人生徒は、高校在学中に日本全土の大学の中から自分の進学先を選ぶことが可能であり、実際、同校は、東京帝大、京都帝大ほか、内地の大学にかなりの数の台湾人卒業生を送り込んだのである。また、同校の存在は、台湾人に高等学校の存在を認識させ、敢えて台北高校ではなく内地の高等学校に進学する者をも生み出す効果もあったと見られる。

同校について語られるべき事は非常に多いが、少なくとも入学後には台湾人に差別を感じさせない実力主義の学校であり、また内地の高校と同じような、高等学校特有の極度の教養主義的な文化を生み出したことを指摘しておきたい。最近日本にも紹介され話題となっている『台湾万葉集』も、その嫡流の1つとあってよいだろう。同書は、台湾では懐古趣味として理解されているようだが(参加同人の多くの意識はそのとおりだろうが)、同校助教授であった、いまなお存命の犬養孝氏⁹⁾(大阪大学名誉教授)が序文を寄せていることから窺われるように、少なくとも主宰者たちの意識には台北高校の文化が今なお保たれている。

同校の台湾人卒業生に聴取りをして感じられる際立った特徴は、当時の政治経済文化学術について日本全体を見下ろす視点が共通に存在している事、そして今日なお、日本の社会を見とおし、世界を展望した視点で日本と台湾の関係を考えていることを指摘しておきたい。高等専門学校卒業生や、中華民国の学校制度への移行により高校入学の機会を逃してしまった人達には殆ど見られないことである。それは、日本の指導的位置に立つ人材を育てる機能を担う高等学校という教育機関の一つであった同校が、台湾人を台湾のエリートではなく日本のエリートとして育てた遺産であろう。

台北高校は、大正11(1922)年に設置された7年制の高等学校(当初、台湾総督府高等学校)で、3年間の高等科のほかに中学校に相当する尋常科4年間で設けられていた。尋常科は1学年が約40人で、小学校又は公学校の卒業生が入学し、高等科は1学年が約160人で、尋常科出身以外のもの約120人は中

学校4年修了者及び卒業生であった。昭和19年9月の第18回卒業生までの累計で、卒業生は文科が1167人、内台湾人164人、理科が1149人、内台湾人が367人であった¹⁰⁾。ただ、尋常科は台湾人の入学者が非常に少なく、毎年4、5人しか入学していない(尋常科も高等科も台湾人の入学者数が少ないように感ぜられるが、それが入学制限のためであったかどうかは意見の分れているところであり、次節に述べるようにいずれにせよ実証されていない)。以上の数値は、高等学校制度になじみのない今日の台湾の人には、同校が台湾人にとってのみ難関であったような印象を与えるかもしれないが、台湾のみならず日本全土の内地人にとっても難関であることに変わりなかった。

なお昭和16(1941)年に台北帝大にも豫科が設けられた。豫科は卒業すると必ず台北帝大に入学しなければならないという点を除いては高等学校と同等の学校で、他の大学に進学できないという制限があったものの、やはり高等学校特有の校風を持ち、独自の教養主義的文化を形成しつつあった。

6 入学制限の問題

本節では、台湾における台湾人の入学制限の問題についてふれることとしたい。中等教育、高等教育への台湾人入学者数が制限され、就学機会が不当に奪われていたということは、入学試験の聴取りでは必ずといってよいほど現れてくる問題である。しかし、本稿では、入学条件に差があったということ自体が、いまだ学問的レベルでは実証的に示されていないということを指摘しておきたい。

多くの書で、入学後内地の方が全般に成績が悪かったこと、台湾人は通常級長になれなかったこと、などが指摘され、また、当然のことのように、その説明として、台湾総督府が台湾人を政治から遠ざけようとして、医学部以外への進学のを閉ざしていたという飛躍した論理が主張され、台湾の各中学校、台北高校、台北帝大等への入学者数の統計が示されている。いずれも大雑把な現象の側面から、その背後に制限があったことを推測しているにすぎず、台湾人の入学を制限したことを明確に示す事実(規

定や通達の存在など)を明らかにしていない。また中等教育以上の学校でどのような仕組みで入学者を決定していたか(例えば校長に裁量権はあったのか等)も全く検討されておらず、日本に引揚げた教員への聴取り調査も全く行われていない⁽¹¹⁾(但し聴取りで真実が解明されるとは限らないが)。事実上、研究されていないというに等しい状態にある。

このように、私は台湾人の入学制限があったという主張の根拠に対して疑問を抱いているが、一方で私は、台湾の中等学校入試に関して、台湾人が不利になるような何等かの共通条件が、広く設定されていたのではないかと、という印象を持っており、それを明らかにしたいと考えている。今、私は、その条件の存在と内容を明らかにする糸口になるのではないかと、ということで、聴取りで知った次の2つの事件に関心を持っている(事実関係については調査を進めている段階である)。(1)新竹高等女学校では、各公学校から毎年各1名しか台湾人を入学させない慣行があったが、台湾人有力者が働きかけをした結果、昭和10年代後半に1つの公学校から2名以上が入学することがあるようになった。(2)昭和19(1944)年3月の台南工業専門学校(現・成功大学)の入試では、1次合格者に例年になく台湾人が多く、大問題となった。しかし間もなく1次合格者に内地人が多数追加され、最終的な台湾人合格者数は例年通りの割合となったが、それが原因で当時の佐久間巖校長が辞職したという⁽¹²⁾。2つの事件は、入学者数制限の問題と深く関わっているように思われるのである。

しかし、入学制限があったとしても、差別をするためという名目では行政的に受入れられていたとは考えにくい。恐らく、なんらかの正当化を伴ったものであったはずである。私は、聴取りをとおして、正当化が次のようにしてなされた例があったのではないかと感じている。大正期に中学校及び高等女学校に台湾人の入学を解禁した際に、公学校出身者の入学を奨励するために優遇する入学枠を設けたところ、その優遇枠が台湾人入学希望者が増えた昭和期に入って逆に慣行として入学者数を制限したのではないかと、ということである⁽¹³⁾。一部の中学校、高等女学校では、それに乗じて内地人の入学枠を保持し

ていたのではないだろうか。これは1つの仮説に過ぎないが、存命の当時の学校関係者がもう数少なくなってしまった現在、私の調査だけでは時機を失する可能性が高いように思えるので、あえてここに提示し、多くの人に検証を試みてもらいたいと考えている。

7 調査の展望

私が台湾人の回想に関心を持ったのは、日本に留学してきていた台湾人の友人達に連れられて初めて台湾を訪れた1980年2月であった。ゆく先々で日本統治期の回想を聞き、どこでも友人たちよりも日本人である私の方が共感をもって話を聞いていることに気付いた。それは安心感をもって話してくれる友人の両親たちに一層強く感じられた。当時まだ事情のよくわからなかった私は、外国人同士のような親と子の関係にいささかショックを受け、以来、台湾の友人達とその問題をよく話しあったものである。

今では、若い世代も日本統治期の台湾に相当に関心をよせ、隔世の感がある。しかし、日本語世代の体験を自由に書き残せるようになったのはやはり少し遅すぎた感が否めない。もう台湾が日本から離れて50年たち、書き記されていない思い出は、急速に消えつつある。かなり多くの聴取りが行なわれ、歴史を語り継ぐ努力がなされるようになっているとはいえ、聴取らねばならないことはあまりにも多いのではないだろうか。私は、15年前に感じた共感を自分の手で書き留める努力をしなければならぬと思うようになっている。

補 記

聴取りを進めていて事実の裏付けを必要とする場合に行き当たるのが学校資料の散佚の問題である。

例えば、台北高校から台湾師範大学に引き継がれた膨大な資料は、既に殆ど失われている。恐らく存在したであろう台湾人の入学試験にまつわる記録は、全く失われているのである⁽¹⁴⁾。同校内に見つかるのは僅かに中華民国への接收後の引き継ぎ関係の文書だけで、卒業者名簿すら残っていないようである。教育部に、管理者側の総督府の文書が保管され

ている可能性はあるが、学校内部の文書が失われたのは調査にとっては致命的である。

一般に、各学校の文書は組織体の記憶であり、その構成員であった教職員・学生の痕跡も留められている。学校文書⁽⁵⁾は、通常はそれだけで保存の必要性が認識されているわけだが、台湾社会にとってはさらに大きな価値を内包しているといわなければならない。それは、日本統治期の学校において、偶発的であったとはいえ形成されつつあった台湾人というアイデンティティの萌芽を今に伝えるものだとしたことである。もちろん学校文書の多くは、学校を運営した人達の立場で作成された官僚的文書であり、一見無味乾燥な平板な事実が書かれているだけである。しかし、その事実は、日本の制度と、台湾人との接触の一次的な記録であり、丁寧にたどっていけば必ず当時の台湾人の息吹きが湧き上がってくるものである。是非とも台湾全土で学校文書の保存が組織的に進められることを望む。

註

- (1) 以上のほかに、山地など警察が管轄している地域には教育所が設けられていた。1941年4月の国民学校令の施行にともなっていずれも国民学校となった。
- (2) 筆者は、以下の2篇のオーラルヒストリー及びその解説でその点を詳述した。所澤潤・陳清桂「聴取り調査：外地の進学体験（Ⅵ）—台南州の農村から、長老教中学、内地の荳原中学校を経て、日本歯科医学専門学校及び東京医学歯学専門学校医学科を卒業—」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第48巻、1999、pp.127-166、及び所澤潤・張厚基「聴取り調査：外地の進学体験（Ⅷ）—斗六小学校から長栄中学校を経て、陸軍特別幹部候補生として内地へ、そしてお婆さんとの出会い—」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第52巻、2003、pp.65-191。
- (3) 所澤・陳清桂、前掲
- (4) このことが出てくるオーラルヒストリーは未発表である。
- (5) この点については、2012年10月に台湾・台北で開かれた国立台湾師範大学台湾史研究所主催「台北高等学校創立90周年国際学術研討会」で、口頭報告した「社会的リーダー階層と台北高等学校—台湾人生徒にとっての入試と「立身出世」—」で論じた。その

シンポジウムの論文集に収録される予定である。

- (6) 所澤潤・陳漢升「聴取り調査：外地の進学体験（Ⅲ）—抵抗の地・龍潭から基隆中学校、台北高校を経て、長崎医科大学卒業—」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第45巻、1996、pp.97-163
- (7) 2012年10月に国立台湾師範大学台湾史研究所主催で大規模な国際シンポジウム「台北高等学校創立90周年国際学術研討会」が開催されるなど、現在では台北高等学校への関心は、原稿執筆当時に比べかなり高まっている。
- (8) 台北帝国大学医学部で入学試験が行われたのは1936年の第1期生に対してのみである。前掲、所澤・陳にその時の陳漢升氏の経験が語られている。
- (9) 1998年10月歿。筆者は1998年3月に完成した呂耀樞氏のオーラルヒストリーを、呂耀樞氏の希望でお送りしたが、返事が得られないまま亡くなられた。所澤潤・呂耀樞「聴取り調査：外地の進学体験（Ⅴ）—石光公学校から、台北高校尋常科、同高等科、台北高級中学を経て、台湾大学医学院卒業—」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第47巻、1998、pp.183-266
- (10) 『台湾総督府台北高等学校一覧 昭和十九年』 pp. 174-177
- (11) 選抜側にいた人物で、筆者が行えた聴取りは唯一、高峯一愚氏のものである。同氏のオーラルヒストリーには、台北帝国大学附属医学専門部での銓衡の経験、及び日本引き揚げの際に台北高等学校の書類から発見した事例が語られている。所澤潤・高峯一愚「聴取り調査：外地の先学体験（Ⅳ）・特別篇 台北帝国大学学生主事補・台北高等学校教授の体験を中心に」『群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編』第53巻、2004、pp.59-85
- (12) 所澤潤「戦時体制と台南高等工業学校—国立成功大学の基盤形成の側面—」国立成功大学主催『成功的道路：第一屆成功大学校史学術研討会』（於・台南・成功大学、2001年11月10日）で口頭発表。国立成功大学歴史学系（編輯）『成功的道路：第一屆成功大学校史学術研討会論文集』国立成功大学、2002年4月、pp.261-286に収録。佐久間は東京に戻った後、立教理科専門学校教授になり、同校教授のまま戦後亡くなったことが確認できている。しかし関係者の間に、戦時中にバンドン工業専門学校校長に転任の辞令が出るようになったため、退職したというような記憶もあり、なお不明のことが多い。
- (13) 筆者は2013年末現在でもそのように感じているが、

検証できているわけではない。

- (14) 入試の詳細な記録は数年のうちに廃棄するのが日本の殆どの学校の慣行であるため、中華民国に文書が引き継がれた段階で廃棄された可能性が高い。そのことは、前掲、所澤・高峯による高峯のオーラルヒストリーで語られている。
- (15) 学校の沿革を記した学校沿革誌を作成していた学校が台湾にはかなりあり、筆者はそれらのうちの一部を翻刻発表した。学校沿革誌は、周年記念誌に掲載される沿革記録ではなく、学校の公的文書として毎年のように記録を書き足していくものであり、周年記念

誌の沿革記録はそれに基づいて作成される。ただし、学校文書はもちろんそれだけではなく、それはそのごく一部である。所澤潤・林初梅「国語伝習所の設置と公学校への転換の記録（一八九八年前後）—台北県蘆洲国民小学所蔵『学校沿革誌 和尚洲公学校』冒頭部分」『群馬大学教育実践研究』第17号、2000、pp.419-454、所澤潤「台湾における近代初等教育創始の記録—台北市士林国民小学所蔵『八芝蘭公学校沿革誌』」（全2回）『群馬大学教育実践研究』第18号、pp.393-417、2001、第19号、pp.415-439、2002